

# Salon d'impressions

印象のサロン Vol.6

東京・六本木の国立新美術館で8月16日まで開催されている「オルセー美術館展 2010—ポスト印象派」。現代美術の源流ともいえる至宝115点が公開される空前絶後の規模の展覧会として注目を集める。各界の最前線で活躍する方々が「印象」をテーマにご自身の活動や作品への思いを語る「Salon d'impressions ~印象のサロン」もいよいよ最終回。今回はプレーヤーとして活躍し、精力的に舞台もプロデュースする夏木マリさんに語っていただいた。



なつき・まり (ディレクター・プレーヤー) 1971年歌手デビュー。80年代に演劇活動を始め、93年にコンセプチュアルアートシアター「印象派」をスタート。2006年にバンド「ジビエ・ドゥ・マリ」を結成。07年にパフォーマンス集団MNTを主宰。後進の指導にも力を入れ、10年モンブラン国際文化賞を受賞。09年に支援活動「One of Love プロジェクト」を開始。8月から音楽劇「ガラスの仮面」に出演する。

## 心は往時のモンマルトルへ

ポスト印象派の中では、ロートレックが特にお気に入りという夏木マリさん。選んだ一枚はモンマルトルのキャバレー、ムーラン・ルージュで活躍した女道化師を描いたもの。楽屋で支度中の彼女は、画家の視線を気にせず、衣装に着替えている最中だ。

初めてパリに行ったとき、カフェでロートレックのレプリカをたくさん見かけました。ムーラン・ルージュのダンサーや、キャバレーの夜を描いた彼の作品に、おすまししていない、生のフランスを感じて一目ぼれしました。なんといってもロートレックの作品には、動き、がありますね。描かれたシチュエーションがユニークで演劇的です

ね。例えば「女道化師シャリュカオ」の年齢を重ねて太った肉体には、そこはかとない可笑(おか)しみを感じるし、人目もはばからずに衣装に乳房を押し込んでいる情景も面白い。「彼女は何をしているの?」「背景の男は誰?」「このころのモンマルトルの男と女の関係は?」などなど、いろいろ想像が膨らみます。現代の日本にいながら、心は19世紀末のモンマルトルに飛び、当時の時間の流れを感じられる。それがロートレックの絵の魅力だと思っています。

歌手として、俳優として、幅広い分野で異彩を放っている夏木さん。だが、そのキャリアを築くまでには、さまざまな経験を積んだ。その一つが華麗なショーで人気を博した「赤坂コルドンブルー」などのレストランシアターでのレビューだった。

華やかな衣装をつけて踊ったり歌ったり。何秒かの間に衣装も靴もメイクも変えて、再びお客様の前に出て行くような過酷な舞台でしたが、とて

今回の1点：アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック作『女道化師シャ=ユ=カオ』

## ベテランの醸し出す余裕と可笑しみ



夏木さんがプロデュースし、出演する舞台「印象派 NEO」 © 白鳥真太郎

## 夏木マリさん

も楽しかった。たぶん、当時のムーラン・ルージュも似たような舞台だったんじゃないかな。だからこの絵に描かれた彼女に共感を覚えます。

「あと1分で出番です。急いでください!」と声をかけるスタッフに、「はいはい、行くわよ、行くわよ。そんなに慌てなくて大丈夫よ」と、おうように答える威風堂々のベテラン芸人。その余裕が絵に表れています。

絵のモチーフに、この彼女を選んだロートレックもブラボー。熟女ならではの雰囲気をとてよく描いています。日本は、子ども文化。だから、若くてきれいな女性ばかりがもてはやされるけど、フランスは「経験を重ねた大人の女性こそすてき」という文化でしょう。そういうところはフランスっていいなあ、と心から思います。

## 自由な想像誘う表現に挑戦

伝統的なアカデミスム絵画中心の美術界に、光と色彩を描いて挑戦状を突きつけた印象派の画家たち。夏木さんは彼らの反抗心に刺激され、17年前から「印象派」と題するパフォーマンスを企画、制作、出演し続けてきた。数々の海外公演も重ねてきたこの舞台、特にフランスでは絶賛され、彼女の挑戦は温かく受け入れられた。

私は演者の表現を、お客様が自由に解釈するパフォーマンスが好き。「印象派」の舞台もダンスはもちろん音も肉表現として、言葉のいらぬ世界を目指しています。「印象派」の絵画のようには、お客様には好きに解釈していただいて感じてもらいたい。前衛的なので、フランスではとても喜んでいただけ、セルジュ・ゲンズブルの姉のジャクリヌさんも手紙をくださった。あれは、すごくうれしかったですね。

以来、フランスとの絆(きずな)が深くなり、先日私がボーカルを務めるブルースバンド「ジビエ・ドゥ・マリ」が「JAPAN EXPO 2010」に行ってきました。この展示会はマンガやアニメなどの日本のポップカルチャーを紹介するパリのイベントで、欧州全域からコスプレをした若者が集まります。私は以前声を担当した「千と千尋の神隠し」の湯婆婆の姿で、バンドメンバーは侍コスチュームで演奏しましたよ(笑)。

表現者として唯一無二の存在感を漂わせ、世代を問わずファンの多い夏木さん。だが、昔は特徴的な自分の声も、日本人離れした彫りの深い顔も、すべてがコンプレックスだったという。天賦の才に恵まれたわけではなく、表現者としての自分を努力で鍛え上げてきた彼女は、身体的にコンプレックスを抱えながら絵を描き続けたロートレックに特別な共感を寄せる。

実際にロートレックと会ったら、すごくいい友達になれそうな気がするんです。ロートレックは体が弱いのに酒飲みで、早世してしまっただけ、そんなバランスの悪いところも人間くさくて好き。彼はどちらかというと弱い人間にも優しい人だったと思うんです。そんなところにとても共感します。若き日の私にパリのポストモダンを教えしてくれたロートレック。いまは心の友達です。



アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック 「女道化師シャ=ユ=カオ」 1895年 油彩・厚紙 64×49cm © RMN (Musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

## 女道化師の楽屋に流れる 素顔のパリの時間